

## シンガポールの金融事情

### 「総合力」が最大の魅力

シンガポールは国際金融センターとして一定の地位を確立しているが、取引高や時価総額など市場規模から見た優位性はそれほど高くない。

例えば、外為取引高はロンドン、ニューヨーク、東京に次ぐ世界第4位の市場を占めているが、株式時価総額を見ると、2007年5月末現在世界第22位と、アジア域内では東京や香港のみならず、上海やムンバイ、深セン市場をも下回っている。

また、債券市場を見ると、発行残高は日本を除くアジアの中で第5位にとどまっている。

「規模」の優位性は乏しいシンガポール市場だが、効率性や利便性といった「総合力」ではニューヨーク、ロンドンに匹敵する高い評価を得ている。

ロンドンの政府系調査機関である City of London が、2007年3月に発表した国際金融センター指標 (Global Financial Centres Index) によると、シンガポールはロンドン、ニューヨーク、香港に次ぐ世界第4位にランクされた。

東京市場は第9位にとどまっており、シンガポールは「規模」では格上の東京よりも評価が高い。

「総合金融センター」として、豊富な品揃え、低税率、行政サービスの透明性などが評価されている。

### 資産運用市場を強化、市場規模は5年で3倍に

金融商品の品揃えが豊富であっても、コアとなる商品がなければその市場の魅力は弱くなる。

シンガポールでは早くから外為市場がコアの役割を担ってきたが、市場が成熟しており成長性が乏しい。

次にシンガポール政府が新たなコアとして目をつけたのが、プライベートバンキングやヘッジファンドなどの資産運用市場である。

海外マネーのアジアへの流入増加や域内の富裕層の拡大などを背景に高い成長性が見込まれるからだ。

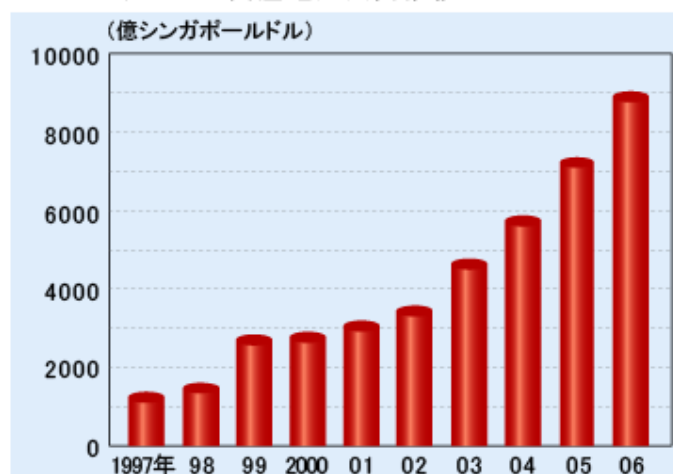
政府は1997年に発表した金融セクター改革の中で、資産運用市場の育成を柱の1つに掲げ、各種優遇税制に加え、資産運用専門の大学院を設立するなど金融プロ人材の育成にも力を入れてきた。

この結果、2006年末の資産運用残高は8910億シンガポールドル(約71兆円)と、過去5年間で約3倍に拡大した。

これはシンガポールの名目 GDP(国内総生産)の約 4 倍に相当する。

預り資産の内訳を見ると、海外マネーが約 8 割を占めており、近年では、中東のオイルマネーやインドなど南アジアのマネーが増加している。

■シンガポールの資産運用残高推移



(資料)シンガポール通貨庁(MAS)資料より  
三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

## プライベートバンキング業務、ヘッジファンドの数が急増

また、資産全体のうち個人資産が約4分の1を占めているが、この多くはプライベートバンキング関連の資産と考えられる。

近年、シンガポールにプライベートバンキングの拠点を設ける金融機関が増加、現在 30 社近くに達しており、アジアのプライベートバンキングの中心となっている。

ヘッジファンドの誘致も積極的に行っている。

ヘッジファンドを取り込むことで、市場の流動性を拡大することを狙っている。

シンガポール通貨庁(MAS)の調査によると、ヘッジファンド数は 2005 年には 100 社を超え、過去 5 年間で 5 倍、資産残高は 2006 年末時点で 260 億米ドルと前年比 2.5 倍に拡大した。

日本のヘッジファンドも 20 社程度進出しているもようである。

ヘッジファンドが急拡大している背景には、法人税軽減などの税制優遇措置もあるが、ファンド設立の申請から認可までが1週間以内と手続きの迅速化が進んでいることも大きいようだ。